

泰山神話と女神碧霞元君

陶陽

衛藤和子・訳

「神話」とは、後世の神話の中の道教神話を指すものである。

泰山の古代神話には、兄妹婚の話(注1)と東嶽大帝の話があるが、後世の神話では、泰山の女神である碧霞元君の話が中心となる。碧霞元君の神話は、今日に至るまで語りつがれている。しかし、今でもまだ一部の人びとが、碧霞元君を宗教的な神として信仰しているため、その神話も迷信として忌避される傾向があり、從来、ほとんど誰も表立つてとりあげようとはしなかった。つまり採集もされなければ研究もされなかつたのである。

私たちが一九八〇年に泰山で調査した折、調査のすすむにしたがつて、多くはないが、碧霞元君の神話を採録することができた。その資料の分析を通して、私は次のように考えた。神を信じ崇めることは迷信である。しかし、民間で口頭創作された神話は、人民の幻想と願望の表現であり、人民の創り出した神話中の神は、人民の意志を代表したものである。神話と迷信は二つの異った事柄である。

泰山の多くの神々の中では、際立つて名高いのは、道教の二神である。一つは男神で、歴代の皇帝が必ず参拝した、天下に名高い泰山の主、東嶽大帝である。もう一つは、女神で、西王母や天后とともに、『三大娘娘』(三大女神)の一つに数えられる天仙聖母の碧霞元君である。王母娘娘廟は漢民族のどの地域にもみられ、また、天后は福建、廣東など沿岸地域の海神で、台灣省では大きな勢力をもち媽祖と称される。碧霞元君の民間信仰は、山東省を中心として北は北京から、南は浙江までである。彼女は北方の女神の最高神とされ、泰山山麓の泰安県では、『泰山老母』とか『泰山老祖母』と呼ばれている。

一九八〇年に私達が採録した女神の話は、口承文芸研究ばかりでなく、泰山の文化、宗教史、民俗信仰の研究にも貴重な資料を提供したと思われる。ここで、私は、その折の調査資料をもとに、泰山神話と碧霞元君に対する私の見方をお話したい。なお、ここでいう

一 碧霞元君の由来

神話上的人物は、歴史上の人物のように、はつきりと考証するこ

とはできない。しかし、有名な神の誕生は、事跡から、その輪廓を考察することができる。

碧霞元君は道教の女神であり、ちなみに「元君」とは女の仙人の称号である。その原型は、古代、泰山地方に伝わる神話伝説上の人々である。晉の張華『博物誌』には、東海泰山神女の記載がある。古籍の考証によれば、碧霞元君の前身の名は玉女と考えられる。

(1) 古文献の記載によれば、碧霞元君の歴史には、次の三説がある。

a、碧霞元君は、もともと東嶽大帝の侍者であり、名を玉女といつた。宋の真宗は、彼女を封じて、東嶽大帝の娘とし、天仙玉女、碧霞元君とした、という説。

玉女は、もともと東嶽大帝の像の前にあつた石の彫像だったが、永い間、放置され、池に沈んでしまった。『蒿庵閑話』の記載によれば、「宋の真宗が、泰山に来て、仮の宿にとまり、池で、手を洗うと、水面から石像が浮び出た。とり出して、洗ってみると玉女だった。役人に命じて、祠を建て、これを奉り、聖帝（即ち東嶽大帝）の娘とし、天仙玉女碧霞元君に封じた。」とある。

b、黃帝が遣わした七人の仙女の一人であるという説。

李譜「瑤池記」によれば、「黃帝はかつて、岱嶽觀を建て、七人

の仙女を遣わした。雲冠をつけ、羽衣を着て、香をたいて修業し、西昆真人を出迎えた。玉女は、七人の仙女の一人で、徳を積んで、道を得た者である。」と

c、泰山の後石屋で仙女になる修業をした民家の娘であるという説。

「玉女卷」によれば、「漢の明帝の時、西牛國孫寧府奉符県の善士石守道の妻金氏は、中元七年甲子、四月十八日の刻、娘を生み、玉葉と名づけた。美しい面立ちで、たいへん聰明であった。三歳で人の道を理解し、七歳になると、法を聞き、西王母に礼拝した。十四歳で、にわかに、その教えを悟り、入山した。曹仙長の指導で、天空山の黃花洞に入り、修業した。」天空山は即ち、泰山の後石屋である。三年で仙人になり、遂に泰山に住んだ。

まだ、他にも諸説あるが、いずれも信憑性に欠ける。

(2) 私達が一九八〇年、泰山で採録した口承の神話伝説によれば、碧霞元君の由来は以下の四説がある。

a、石敢当のむすめであるという説。

この説は記録資料には今のところ見あたらない。口承資料の神話「泰山の女神碧霞元君の由来」によれば、碧霞元君はたきぎとりをしていた民家の娘で、石敢当の三番目の娘であった。徂徠山の洞で、観音の導きを受けたために居ついた。

b、玉皇大帝の妹あるいは娘という説。

c、积迦の妹あるいは女弟子という説。

d、雲遊仙人説。

(3) 確実な史実は、宋の真宗が、勝手に碧霞元君をかつぎだしたものである。

一一 泰山の争奪

宋の真宗趙恒は、軟弱、無能な皇帝で、しばしば、遼、金との戦いに敗れた。彼の腐敗した統治を維持するために、宰相の王欽若の詭計を信じ、天書を偽造し、人々をだました。彼は「封禪（帝王が泰山にでかけ、天地を祭ること）」を、しさえすれば、四海を治め、他国に誇示することができる」といった。前もって、泰山に人を派遣して、天書を埋め、天から天書が降ってきたといつわったばかりか、さらに東嶽大帝を「天齊仁聖皇帝」に封じ、玉女を「天仙聖女碧霞元君」に封じたのである。ここで初めて、碧霞元君は世に知られるようになった。『宋史紀事本末』はその間の歴史を忠実に記録している。

碧霞元君の起源は、この史実ではっきりわかるように、宋の真宗の「神を借りて、民を安んじる」政策の申し子であり、皇室がうちらてた神なのである。

碧霞元君は宗教神として作られた、迷信の偶像である。同時に、この碧霞元君は、人民が自分で神話の中につくり出した神でもある。

神話の碧霞元君は、内容が充実し、生き生きと躍動する女神の芸術的典型であり、機知と計略に富んだ、変化自在の神通力を持つた地方の守護神である。

碧霞元君の神話の中から、まず、どのようにして、碧霞元君が泰山の主となつたか、その由来譚をお話したい。

泰山はもともと、祝迦が占拠していて、彼は山頂に印として木魚を埋めた。碧霞元君は四海を雲遊し、落ち着き先を捜し探ねていたが、泰山の風景に魅せられ、彼女はこの山の主になりたいと思つた。他人と山争いをしたくなつたので、山頂に印として、しあわの靴を埋ようとした。穴を掘ると木魚がでてきた。祝迦のものだと知つた彼女は、なんとかして祝迦にかわろうと考えた。眉根にしあわを寄せると、計略が浮んだ。彼女は、さらに三尺掘つて、自分のしあわの靴を埋め、その上に、木魚を埋めた。祝迦は、碧霞元君が泰山に魅せられて、離れようとしないのを見て、元君にいった。「この泰山は私が先に自分の中にしたんだ。」元君は「あなたがくる前に、私が自分のものにしたんです。」と言つて、二柱の神は、争い続けた。ある時、玉皇大帝が天下各地の仙人を泰山に召集し、「天下の名山には皆、山の神がいるが、泰山だけはまだいない。誰が泰山に住むのが、適当だと思うか？」と言つた。各地の仙人は、「慣例に従えば、泰山に早く来た者が山の神になります。」と答えた。二柱の神は、又、言い争いを始めた。玉皇大帝は「お前達は、どちらも自分が先だといつていて、証明できるか？」と尋ねた。祝迦は、「木魚を埋めました。どうぞこちら下さい。これが、私の証拠です。」と言つた。元君は「ちょっとお待ち下さい。私にも証拠があり

ます。もう少し掘りおこしてみて下さい。」と言った。釈迦が掘つてみると、しあらの靴が片方でてきた。神々は、靴が下で、木魚がある。当然、元君が先に来たと判断して、彼女を泰山の神に封じた。釈迦は、女神の「あべこべに埋めたしあらの靴」の計略に反論できなかった。

この種の計略は、人々の知恵であり、自分達の福利を願うためには、女神が山を占拠することを望んだのだ。だからこそ、このように生き生きとした不思議な物語が産み出されたのだ。その他の理由として、この土地の人々は、儒教、仏教、道教の三つの教えの中で、儒教と道教を偏愛し、仏教はあまり歓迎しなかった。だから、道教の女神である碧霞元君と釈迦の山争いの時、ここの人々は、道教の神が勝つことを願つたのだ。

別の神話では、碧霞元君が占拠していた山へ、後から龍王が来て、争いになつた時、龍王は「矢を射つて、遠くへ飛んだ方が管理することにしよう。」と言つた。碧霞元君は弓を手にし、神の矢ばねをつがえると「オウ！」と一声、東へ射つた。矢は、三日三晩、飛び続けて、千里も遠くへ落ちた。龍王はやむなく東の海へ退いた。

他に、白氏郎が、神々をおさえ込んでしまう話がある。この話も人々の「泰山の女神がとり込まれる」のを望まない証である。

白氏郎は、呂洞賓と修仙美女の白牡丹とのあいだに生まれたが、父親の呂洞賓が仙人で、いっしょにすまないので、いわば私生児であった。玉皇大帝は、もともと、白氏郎を皇帝になる運命と定めていた。白氏郎が学校に入ると、毎日、白いひげの老人が彼を背負つて、河を渡つた。白牡丹は息子がゆくゆくは皇帝になるのを知ると

と、隣人たちが、「夫もいないくせに」とか「ててなし児」とか陰口を言つていたことを思い出し、火かき棒で、かまどの神様の顔をたたきつけながら、「私の息子が皇帝になつたら『かたき』というかたきは全部とつてやる。うらみをはらさずにおくものか、血が河とながれるまでやってやるぞ。」といきました。かまどの神様は、天に告げ口をした。玉皇は、白氏郎の龍筋（皇帝になるもののシンボル）を抜きとることに決め、彼を皇帝にすることはやめたので、天下が大いに乱れることは免れた。

彼を背負つて河を渡つた白ひげの老人、太白金星が白氏郎に告げた。「あなたが龍筋を抜かれる時、歯を食いしばって、口の中の龍筋をひき抜かれないようにすれば、『金口玉牙』が残るだろう。」この話は本当だつた。白氏郎は案の定、口の中に龍筋を残した。白氏郎はかまどの神様を恨み、彼のつげ口に腹を立てた。その上、天下の神仙にも恨みを抱き、天下の神靈をとじ込め尽そと考へた。彼はひょうたんを持って、呪文を唱えかまどの神に「ひょうたんの中へはいれ！」と言つた。「チ」と音がしたかと思うと、かまどの神はひょうたんの中へ入つてしまつた。白氏郎は、ひょうたんをぶらさげて、あちこちへ、神をとじ込めてまわつた。

碧霞元君が折りりかぞえて占つてみると、たいへん、今にも白氏郎が泰山にやつてくるではないか。法術を使って、四匹の火龍を派遣し、白氏郎を坂に追いつめた。彼は、火にあぶられて大汗を流し、のどは喝くし、腹も空いてきた。ちょうどそこへ、一人の老婆が単餅（小麦粉を薄く焼いたもの）とおもゆを持ってやってきた。白氏郎はとびつくように、たべさせてくれと訴えた。老婆は「こ

れは、私の子供にもつていいものです。あなたがもし、跪いて、

四回、地にぬかずき、三回『母上』と言えば、恵んで上げましょ

う。』と言った。白氏郎は飢えと渴きに耐え難く、四回額突いて、

『母上』と三回叫んだ。食べ、飲み終わると老婆の姿はなかった。

この老婆は碧霞元君が姿をかえていたのだ。彼女は碧霞祠に帰つ

て、一人、白氏郎が来るのを待つた。白氏郎が碧霞祠に入つて、呪

いを唱え、ひょうたんにとじこめようとすると「お前には良心がないのか」と大変怒つて、「お前は私の餅を食べ、おもゆを飲んだのだ。四回、拝み、三回『母上』と呼んだのだ。他の人をとじこめる

のはかまわないと、母である私をとじこめることはできないぞ。」と言つた。

白氏郎が頭を上げると、神の座にすわっていたのは、なんとさつき飯をくれた老婆だった。急いで、跪いた。あわてた拍子にひょうたんを地面に落とした。この時、ひょうたんの中につめ込まれていた神々は、続々と飛び出て、四方八方へ、逃げ去つた。寺にぶつかったものは、寺に入り、洞に出入りしたものは洞に入るというよう

に、泰山のまわりは神仙だらけになつた。これがすなわち『泰山は神があつまる』の由来である。以来、これらの神々は、皆、碧霞元君の管理下におかれ、彼女の勢力範囲は日ましに拡大し、たくさんの神々の主となつた。

護神の典型であることを述べてみよう。

1 玉皇大帝をやりこめる

玉皇大帝が泰山を占領しようと元君と争つて、敗れた。怒つた大帝は、泰安の人々を水びたしにして、碧霞元君への参拝者をなくそうと考えた。しかし、碧霞元君は泰安の人々の安全と五穀豊穣を守るために、玉皇大帝と機知あふれる勇敢な闘争をした。

玉皇大帝は、碧霞元君に千戸の村を水びたしにするように、命令した。碧霞元君はやむなく承諾した。大雨が六月初めから七月十五日まで降つた。

玉皇は元君に尋ねた。「千戸の村は水没したか?」元君は答えた。

「水没しました。」玉皇が天宮から見下すと、作物は青々と繁り、ただ『十百村』だけが水没しているのを発見した。玉皇は命令に従わない元君を怒り、責めたが元君は、「おたずねしますが『十百』は千ではありませんか?」と言つた。玉皇は彼女を言い負かすことはできなかつた。

玉皇はなおも力づくで押さえつけようとして、万戸の村を水没させるように命令した。大雨は、七月十五日から九月九日まで降り続いた。女神は水を傾けて、東海に流す法術を使つた。天帝は今度こそ、泰安は水没したと思い、密かに、南天門から、下を見れば、又もや、だまされていた。彼女は『万家荘』だけを水没させて、万戸の村の意にしていた。玉皇は元君の智謀が秀れていることを悟り、二度と難題をふつかげなかつた。以後、雨を降らす時は、元君に知らせるようにさえなり前もつて泰山の頂に雲をふんわりかぶせて、あらかじめ、雨になるだろうと知らせた。泰安には「泰山にかさが

三 神話にみる女神の性格

つぎには、いくつかの話から、碧霞元君が智勇を兼ねそなえた守

かかると、作男はやすめる」ということわざがある。

もう一篇「碧霞祠の額が江南へ流れ去った」という神話。

この神話も、玉皇大帝が泰安を水没させようとした時の話である。玉皇は、五湖の湖、九江八河の龍王を召集して、泰山の元君を追い出すように命令した。

元君は、泰山の頂で、手に宝剣を持って、法術を使つた。彼女は、下々の人々を水びたしにするのを恐れ、あわれみと悲しみから、三日三晩泣いた。三日目に、龍王達が玉皇の命令に従つて、世界中の水を集め、泰山の頂上へぶちまけた。元君は宝剣で洪水を空に押し上げ、着物の袖で受け止めてから、手を伸ばして、水を長江へ流した。江南の人が、水の中から額を拾つてみると、「金光普照」の四つの大きな字が書いてあつた。彼らはこれが泰山の頂上にかかつていた額であるのを知り、泰山の海拔一五〇〇メートルの山頂の額が、長江へ押し流されたのだから、山東地方も全部、水没してしまつただろうと思い、人をやつて、山東地方をさぐらせたが、山東が無事なばかりか、泰安までも、田園は豊かに実り、人々は平和に暮らしていた。以来、江南の人々は、特に、泰山聖母を信仰し、江浙一帯の人々はその祭りの日には、必ず、泰山へお参りに行つた。

2 乾隆帝をやりこめる

神話に「廻馬嶺」という話がある。清の乾隆帝は泰山へ行って、天を祭ろうとし、県知事に、登山の準備をするように命じた。県知事は乾隆帝に、「用意万端とのいました。ただ泰山は貧乏人が多いのですから、道々、小銭をほどこされますと、途中で小銭が、足

りなくなるかもしません。」と注意した。これを聞いた乾隆帝は激怒していった。「私は国の主だ。たかが、小さな泰山でなにを困ることがあろう。麻袋をいくつも用意して、小銭をつめろ、なに、足りないものか。」と。

次の日、乾隆帝が城を出て、北をみると、山道には喜捨を受ける者がきりもなくつづいている。乾隆帝は進みながら喜捨をするが、錢がいくらあっても足りない。ついに困りははてた乾隆帝は、やむなく馬をひきかえさせて、帰つた。帝がひきかえした地点をそれから「廻馬嶺」と呼ぶようになった。県知事は「これまではこんなに多くいなかつたのに、今年はなぜこんなに人が多いのだろう。」と不思議がつた。翌日、朝早く、北山の坂へ調べに行くと、神様のしづぎだつた。草の一本一本の先に穴あき錢が一つづつひつかつていていたのだ。泰山の女神が「小さな泰山」と見くびつた乾隆に腹を立て、「皇帝め、いばりくさつて。」「小さな泰山」かどうか見てみる。えらぶつていると、山にも登れないぞ。お前が馬をまわした場所は『廻馬嶺』と呼ばれ、後の世の人々から、笑い種にされるぞ。』と女神は考えていたのだ。

3 王羲之をやりこめる

ある年、大書家の王羲之と彼の友達が泰山へ遊びに行つた。王羲之は「泰山は本当に美しい。その景勝は、私の字のように天下にとどろいている。」と言つた。女神は王羲之の態度が傲慢だと感じて二人の下女に変装し、ぼろ屋をつくつた。その真ん中には、下半分の壁があつて、二人の下女が坐つていた。一人は餅をこね、一人は餅

を焼いていた。餅をこね終った下女は、のし棒にのっけて、餅を放り投げた。餅は壁を越えて、平鍋の上にピタリと落ちた。餅が焼けると、もう一人の下女が、「翻餅劈子」（餅をひっくりかえす道具）にのせて、壁越しに投げ返すと、ちょうど、「蓋塾」（高梁の茎を編んで作った皿）の上に落ちた。王羲之が下女の腕前をほめると、下女は「なあに大したことではありませんよ。あなたの字と同じで、慣れているだけですよ。」と答えた。ここで始めて、王羲之は、女神が、自分のうぬぼれを嫌つて、いことに気が付いた。

実のところ、これは人々の視点であり、人々は高慢尊大に賛成しないので、物語を作つて、みんなを戒めた。これらの話は、誰がつくったのだろう。貴族達がつくったのではなく、労働者自らがつくりだしたのだ。スター・リンの名言に「万物はすべて一時的なものであるが、人民だけは不滅である。」という言葉があるが、労働人民が神を創造し、それと一緒にその神にまつわる神話を創り出したのだ。上は玉皇に反対し、下は皇帝に抵抗した。それは、泰山の碧霞元君の知恵というよりは、泰安人民の世界観を表現したものなのだ。「どうして、反抗しなければならなかつたか？」それは、玉皇が人々を無視し、横暴なことをして、勝手に雨を降らせ、災をもたらし、人々を苦しめたからである。皇帝はもともと人々を尊敬せず、とるに足りないものと軽視した。しかし、もし人々と対立すれば、泰山に登ることさえもできないのである。

私はさらに、泰山の女神と女性の関係について話そうと思う。女性達は特に女神を崇拝し、毎年、六月、泰安の村々の女性達は、グループをつくって、泰山へお詣りに行く。これは何のためなのか？それは、泰山の女神に、女性達が特別な関心を寄せているからである。今、二つの例を挙げる。一つは、民家の娘を救つた話、一つは後家を救つた話である。

1 「娘を救う」

泰山には「三笑處」と呼ばれる名勝があつて、たくさんの物語がある。その中に一種かわつた話があつて、「泰山の女神が、民家の娘を救う」という型である。ある不正役人は、美しく成長した民家の娘がお詣りに行くのを見かけ、悪い心を起こし、子分に命じて、娘を無理矢理かごに乗せた。娘はワアワア泣くだけで、どうしても従わない。この時、下女が現われて、不正役人を叱りつけた。「昼中に、何と無礼なことをするのか。」不正役人は承服しない。下女は「二人で賭をしよう。路ばたのこの大きな石を、三回、大笑いして、動かせたら、娘を連れて行つてよい。動かなければ、私が連れて行く。」と言つた。不正役人は三回、大笑いをしたが、動かなかつた。彼はそれでも、ひきさがらずについた。「今度は、お前がやつてみろ、動いたら、連れて行け。」と難題をふつかけた。ところが、下女が三回、大笑いをすると、地が動き、山が揺いで、石が跳びはねた。県の役人には、これが泰山の女神の靈験であることわかり、地面に額突いて許しを乞うた。下女は、娘がひざまずくと、「急いで逃げなさい。」といって、見えなくなつた。

この女神は、本当に地方の守護神たるにふさわしい。封建社会では「役所の入口は南にあいているが、道理があつても、金がなければ、入っていくな」のたとえ通り、県知事は、大老爺（知事様・大臣那様）と称して横暴なるまいをした。人々には、悪い役人を处罚する権利はなかつたが、女神の力を借りて恨みを晴らした。これは、神話の特殊な効用であつて、たとえ皇帝であろうと、県知事であろうと、正しくなければ、口承文芸の中で、人民の鞭が下つた。

2 後家を救う

舅とふたりで暮らしている後家がいた。後家はとても孝行者で、夏は、まず自分が舅のベットに横になつて、まわりの蚊に自分の血を腹いっぱい吸わせて、蚊が舅を咬まないようにして、冬は、まず自分が先にベットに入つて、ふとんを暖めた。他人が誤解して、後家と舅の間はおかしいと考えた。

ある年の六月、後家は村の女達と一緒にお詣りに行つた。道々、女達は、「後家と舅が一つのオンドルで眠るという、恥知らずのことをしていながら、お詣りをしたとて何のご利益があるう？」とうわざした。これを聞いた後家は、身に覚えがないと、頂上から身を投げた。みんなは棺おけを買い、彼女の死体を担いで、村へ帰つた。村の入口まで来ると、棺おけがどうしても持ち上らない。舅の家へ知らせに行くと、後家が家に帰つているではないか。狐につままれたように、「崖から身を投げるのをこの目で見たのに、どうして、家へ帰つているのか」と尋ねた。後家は、「目を閉じて、下へ跳んだ時、急に風が吹いたかと思うと、家に吹き寄せられていた」と答えた。

た。棺おけを打ち割つて調べてみると、果して、「孝婦の扁額」が納まつていた。

勿論、この話は、迷信の色彩を持つが、その主旨は、女神を借りて、青年が、老人を敬うように教育することにあつた。神話の中に人々の本心がある。それは、私達が神話を研究する上で、特に注意を払わねばならない基本点である。それは、私が神話を研究する上で、特に注意を払わねばならない基本点である。私は、私が現代の若者に対して、年寄りを敬わないと考へてゐるので、この物語を話す。彼らの意図は、女神の力を借りて、自分の主張を宣伝したいのだ」と感じた。

泰山の女神は、これまでずっと、庶民と対立せず、守護神といふ性格は、終始一貫している。

碧霞元君の性格の中には弱点もある。彼女が外に向かって、管轄範囲を拡大するような時、あまりすぐれているとはいえない。

妻子牙（齊の太公望）が彼女に泰山の周囲五十里を管理させると言つたとき、彼女は納得しなかつた。妻子牙は「それでは、あなたが山頂に立つて、物を投げ、遠くに投げられただけ、あなたの領分としよう」と言つた。元君が石を握つて投げようとすると、妻子牙は「一石は地面にいっぱいあるから、見分けがつかない。やはり、あなたの身につけている物を投げるのがわかりやすい。あなたのししゅうの靴を投げて下さい。」と言つた。元君はすぐにしてしゅうの靴を片方脱ぐと、投げた。靴は軽いので、泰山の南麓へ落ちた。妻子牙が封じると言つたのに比べて五十里少くなつた。

この話は、碧霞元君が人々を守るために、玉皇、龍王、皇帝、不

正役人と鬭う時には、勇敢で知恵もあるが、彼女に私心が入ると、

妻子牙の話にだまされてしまったという例である。だが、全體から見れば、碧霞元君の姿は完全であり、性格は統一されている。彼女は地方の守護神であり、性格の中に、いくらくか欠点はあるが、人々は彼女をいささかも、偶像崇拜しているわけではなく、彼女も一個人の人間と同じように、仇も打てば、私欲もあった。しかし、「焼き餅やき」や「仇討ち」の心は、有名なギリシャ神話の最高の女神ヘラと比べれば、碧霞元君の性質はまだ、善良で可愛いものだ。

まとめ

いくつかの女神の特徴をあげておく。

- 1 碧霞元君は変化自在の通力を持つた、守護神である。天では玉皇と戦って勝ち、下界では、皇帝を打ち負かした。
- 2 碧霞元君は人々を大愛した。彼女はいつでも、下女に化けたりして人を救つた。例え崖から飛び下りる人があれば、手を伸ばして押しとどめ、又、不正役人の手から娘を救い出した。
- 3 碧霞元君には、謙讓の美德もあつた。いつも、老婦人に変装して人を救うと、サッといなくなつた。手柄を少しもひけらかさなかつた。彼女と河の神様の柳展雄が共同戦線を張つて、玉皇大帝に勝つた時、人々がお礼を言おうとする、元君は「私は結構だから河の神様の柳展雄にお礼を言いなさい。彼は芝居見物が好きだから、彼のために、芝居をやりなさい。」と言つた。以後、泰山の旧県鎮では、毎年、柳展雄のために三日間大がかりな芝居をかけて、河

神大王をお祭りする。

人々は何でこれほど、この女神を熱愛したのだろうか？ 泰安の

庶民は、何のためにこの女神「老奶奶」を信仰したのだろう？ じつは、それが人々の願いであり、意志であったのだ。その上、この種の人々の願いと意志の底には、社会的原因があつたのである。中國社会の特徴は、長期に亘る封建社会であり、封建皇帝の專制及び、

様々な圧迫と搾取、それに加えて、天災戰禍で、人々の生活は、貧困と苦痛の極限に達した。だから、人々はこの泰山の女神を保護神として創り出した。様々な天災と戰禍に抵抗し、人々は自分達で幸福な生活をきりひらくという勇氣をふるい起こした。婦女子が特にこの女神を信仰したのはどうしてだろう？ 長期に亘る封建社会で、たび重なる圧迫と偏見を受けた婦女子は、社会の様々な不平等

な扱いに怨みを持ったために、精神的な拠り所として、泰山の女神が彼女らの保護者となることを願い、自分達の心中の苦痛と願望を訴え、彼女から幸福を賜わることを希つた。泰山の女神の地位は日ましに高くなり、職權の範囲もますます拡大し、農作、平和、幸福、長寿、子宝、そして疾病邪氣を払うなどなど、不可能なことはなくなつた。このため、彼女の勢力は、元々の泰山の神主である東嶽大帝を追い越した。東嶽大帝は道教の地獄の天帝であり、あの世とこの世を支配して、権力は極りない。彼は、秦の始皇帝の封禪以来、歴代の皇帝が必ず参拜する尊い神である。しかし、碧霞元君が有名になってからは、東嶽大帝の地位は急落した。三月二十八日は東嶽大帝の誕生日で、昔は毎年、泰山の町で盛大な祭りが行われた。これを多くの人々が、碧霞元君の誕生日と勘違いしている。実際に

は碧霞元君の誕生日は四月十八日である。のことから、女神である碧霞元君がすでに、泰山の主に昇進したことがわかる。

神話とその形象は人々が創造したものである。神話が表現するものは、人々の幻想であり、意志であり、希望である。だから、私達の神話研究は、これら的基本点をおざりにできない。又、これは、神話の本質的な特徴の一つであるといふことができる。

今日、私達が研究する中国神話は、中国の社会史、宗教史、民族史と結合しなければならない。例えば、宋の真宗が偽って天書を降したということは、宋史上の大事件であった。また、道教と仏教の闘いを反映している泰山争奪戦は、仏教と道教の闘争のいきいきとした資料を提供した。神話の中から、いつも、民俗信仰と儀礼の起因を探ることができる。例えば、旧県鎮で、毎年河王大王柳展雄のための芝居がかかり、私は子供の時、いつも見に行つたが、何のために、河王大王に捧げる芝居をやるのか知らなかつた。一九八〇年、泰山神話の中から、やつとそのわけを知つた。すなわち、「柳展雄は玉皇が大雨を降らせようとするのに逆つて、手柄があり、碧霞元君が人々に、芝居を奉納するようにさせた。」からである。中國神話の重要な特徴は、それがいつも、歴史、宗教、民俗信仰を映し出す鏡であり、その中から、人々の願望と理想を理解することができる。泰山の神話をながめれば、正にその通りなのである。以上が、私の未熟な見方であり、専門家の皆様の忌憚のない御教示をお願いする次第です。

注1 兄妹婚型の人類起源神話は、南方少数民族の間に広く伝承さ

れ、漢族地域にはいたつて少い。泰山のそれは「人祖的故事」といひ、二人残された兄妹に神仙が、石臼をころがして合わさつたら結婚せよと教え、そのとおりになる話。

(タオ・ヤン、中国民間文芸研究会)